

「チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部2年 栗田健太郎

私が海外派遣のプログラムに参加したのは、これが初めてである。今回のプログラム以前には、私は留学といっても、具体的にどんなことをすればいいのか、どのような利点があるのか、ということ自体に対して非常に無知であった。しかし、この2週間の派遣プログラムを通して、一種の「お試し」のようなもので、やや限定された観点からではあるが、海外留学という選択について非常に具体的な感覚を手に入れることができたと思う。現地学生との交流や文化体験など、日本にはできない沢山の貴重な経験をした一方で、日本では経験しない苦労をしたのも事実である。そのメリット・デメリットを身を持って体感することによって、それまでやや漠然としていた海外留学という選択肢を、具体的・現実的な選択肢として意識できるようになった。

国際交流ということについても、それまでは抽象的で理念のようなものだったが、この渡航を通して私は少し具体的なものとして捉えられるようになった。タイでは、日本は産業的な影響を強く及ぼしているし、文化面においても日本の漫画・アニメが好きだという学生に何人も出会った。日本では、タイは「微笑みの国」として知られているし、マッサージや料理などは日本の街角でも見ることができる。しかし、決してそれだけでは知ることの出来ない両国の文化はたくさんあるし、それを学ばなければお互いに理解できたとは言いが出来ない。実際に2週間タイに滞在することで、私は遠く離れていては決して分からなかつたであろうタイの文化に触れることができた。一方で国際交流とは、そのような言語化しづらい深層的な文化の理解・実感であり、決して表層的な文化の輸入・輸出に留まらないのではないかと深く感じさせられた。

私は当初、言語文化に興味を抱いてタイへ行ったのだが、私が経験したなかで最も強く印象に残ったのは、言語に留まらない現地学生や先生との交流だった。現地学生は私たちに非常に親切にしてくださり、大学近辺のサヤムの町中を案内してくれたり、食事に連れて行ってくれたりしたのに留まらず、私と一緒に日本の漫画やアニメなどについて話してくれたり、逆にタイの文化について語ってくれることもあった。会話はほとんど全て日本語だったのが心残りだが、彼女たちとの交流は非常に貴重な海外経験であり、それに留まらず非常に楽しくもあった。

研修の後半、私は食あたりで体調を崩し、心配した現地の先生が市内有数の私立病院に連れて行ってくださった。いくつかの授業・プログラムに出席することができず、当時は非常に悔しく残念な気持ちを抱いたが、今から思うとあれも非常に貴重な経験だったと言えると思う。酷い腹痛で寮の部屋の外に出ることができず、しばらく辛い思いをしていたが、数日で全快し、幸いにも共同発表などには出席することが出来た。現地の先生への感謝が深まったことは勿論、今後海外で病院に行くことになっても慌てない強い心が育ったように思う。

プログラムの内容はタイ国内の遺跡や名所の訪問などもあったが、タイ語について英語で教わる授業と、日本文化について現地の学生とも交流しながら日本語で発表する授業が大半だった。タイ語については、「Survival Thai」というテキストを用いて行われ、事実全ての範囲が終わった後半には、英語の通じないタクシーの運転手や服屋さんを相手にしても、なんとか要求が伝わる程度のタイ語力を付けることができた。勿論今後更に勉強する必要はあると思うが、今一番必要なことを必要な順番で勉強するという意味において、非常に効率的で有意義な授業だった。

私は進路については、まだ就職か進学かも決めかねている状況ではあるが、少なくとも「海外で働く」ということについて、その長所や短所がより具体的な形で想像できるようになった。将来どのような進路をとるかはまだ決めていないし、そこにどれだけ海外での勤務／修学があるかは分からないが、将来自分がどのような決断をとるにしても、今回の経験がその貴重な判断材料になってくれることは間違いないように思う。